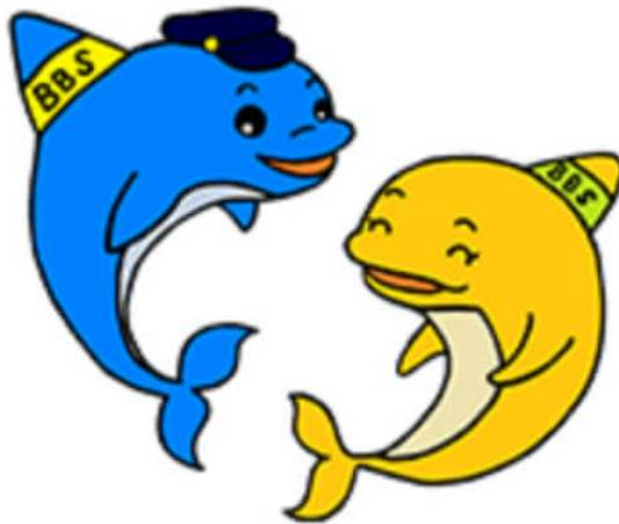


2021年2月27日～28日

国立京都国際会館

第14回国連犯罪防止刑事司法会議
日本 BBS 連盟バーチャル展示資料(別冊) (日本語版)

日本の BBS の活動事例紹介



特定非営利活動法人 日本 BBS 連盟

〒151-0051 東京都渋谷区千駄ヶ谷 5-10-9
更生保護会館 3 階
<http://bbs-japan.org>

目 次

1 非行少年等に対する立ち直り支援

事例1 ともだち活動(1)	p.1
事例2 ともだち活動(2)	p.2
事例3 三者連携プロジェクト	p.3
事例4 少年院での学習支援	p.4
事例5 児童自立支援施設でのレクリエーション	p.4

2 非行防止活動

(1) 少年の健全育成・非行化防止活動

事例1 子ども食堂	p.5
事例2 不登校少年に対するオンラインでの学習支援	p.6

(2) 広報・啓発活動事例

事例1 第70回“社会を明るくする運動”における活動	p.7
事例2 薬物乱用防止キャンペーン	p.7

(表紙のイラストについて)

一般にはなじみにくいと言われる更生保護制度について、市民に関心をもってもらい、理解をしてもらうために、更生保護ボランティア団体はそれぞれが親しみやすいキャラクターを有しており、BBSはこのイルカ兄さんと姉さんを用いています。ちなみに保護司はクジラ、更生保護女性会はオコジヨのキャラクターでポスターなどに登場し広報しています。

1 非行少年等に対する立ち直り支援

事例1 ともだち活動（1）（福岡県内のBBS会員からの報告事例）



対象少年について

- ・ 少年院を仮退院し保護観察中の 15 歳の女子少年
- ・ 深夜に、しばしば友だちと一緒に街へ遊びに出かけており、友人関係の改善が必要と思われた。
- ・ 日中は始終スマートフォンを使用しており、中学校には不登校がちであった。

活動内容

1 活動開始の端緒

当時、少年の保護観察を担当していた保護観察官が、少年と母親との面接の中で「BBS 会員と一緒に過ごすことで他者との良い関係性を築いてみないか」と提案したところ、彼女らは賛成し、保護観察所から BBS 会に活動実施の依頼があった。

2 活動方針

BBS 会員が、近所のカフェで少年と彼女の母親と初めて会い、先輩の BBS 会員を含めて活動の方針を話し合った。少年の提案で買い物に行ったりおしゃべりをしたりすること、母親の依頼で学校に通うことができるように勉強と人間関係のサポートをすることが決まった。

担当した BBS 会員のコメント

活動を通して少年と関わるにつれ、彼女への私の印象は変化しました。最初、彼女は不安そうに見えました。その理由の 1 つはおそらく、彼女が少年院から出てきた直後だったからでしょう。ですが、買い物や食事を一緒にしながら何度か会ううちに、私は彼女がおしゃべり好きなどこにでもいるような少年だということを知りました。毎日の楽しい出来事や好きな食べ物について、さらには学校にいるかっこいい男の子についてまで話をしてくれました。

話題が増えるに連れ、彼女はより深い悩みを私に打ち明けるようになりました。私たちの年齢差は、彼女が私に心を開くのになおとよい差でした。日本においては 6 歳差はとても大きな差に思えますが、お互いを同世代と捉えることもできます。彼女が私のことを「少し年上のお姉さん」として、ロールモデルとして見ていることを私は感じました。

私たち BBS 会員は、少年と同年代です。それによって私たちは少年と同じ視点に立つことができ、良い関係を築くことができます。多くの非行少年は、他者とコミュニケーションをとることが苦手です。BBS 会員との間に得られる信頼関係は、少年たちがコミュニケーションスキルを伸ばしていくことの支えになり、少年が感じる寂しさは段々と少なくなっていくと思います。

このように、BBS 会員と関わることによって、少年たちは孤独を感じなくなり、さらには周囲の人たちとうまく付き合っていくことができるようになるのではないかと感じました。

事例2 ともだち活動（2）（東京都内のBBS会員からの報告事例）

対象少年について

- 少年院を仮退院し、保護観察中の15歳の男子少年



活動内容

1 活動開始の端緒

高校へ進学させたいという少年の母親の希望があり、保護観察所を介して、高校受験のための学習支援としてのともだち活動の依頼があった。保護観察所で、保護観察官、保護司、母親及び少年と初顔合わせをしたところ、少年はあまり積極的ではなかったものの、ともだち活動を行うことを受け入れた。

2 活動内容

当初は、保護観察所の依頼どおり学習支援をしようとしたが、本人の勉強に対するモチベーションは低く、本人はしばしば約束の場所に来なくなった。そこで、まずは本人が好きなのと一緒にやりながら関係を築きたいと思い、公園でサッカーをしたり、他の会員や保護司さんなどを交えてグループで活動したりしたところ、彼は次第にリラックスした様子を見せるようになった。

しばらくして、保護司面接に同席すると、本人から、「高校進学はせず、仕事をしたい」との話があり、本人の母親、保護観察官、保護司とともに話し合っ、仕事をしつつ通信制の高校に進学するという結論に至った。そこで当初の学習支援という目的を依頼元や本人と考え直し、「親しい関係を築きつつ、将来の様々な可能性について一緒に考える場」にするという方向性がまとまった。

やがて、本人は悩みつつも、仕事を続けることとし通信制の高校はやめてしまった。その是非については私も分からなかったが、それまで進路に対してかなり投げやりだった本人が、自分の将来について自分で真剣に考えることができたことはいうれしく、その姿勢を支持した。

半年もすると少年の生活は安定し、休日も職場の仲間や先輩と遊びに出かけるようになった。彼は既に自分の世界を持ち、これまでのような私の関わりは必要としていなかった。私はそれを喜びつつ、反面、一抹の寂しさもあったが、ともだち活動の終了について考えるときがきたと感じた。

担当した BBS 会員のコメント

私の活動においては、ときに担当保護司さんの本人面接に同席させてもらったり、スーパーバイズを受けたりできたことが、私を支えてくれました。特に、本人が進路に悩んでいるとき、私も一緒に揺れ、どういう選択がいいんだろう、どう彼を支援できるだろうと悩んでいたのも、保護司さんに次のような話をしました。

「学習支援を依頼されたが、本人の勉学への意欲は下がっている。彼は今まで認められた経験が少ないが、今の職場では仕事を熱心に教えてくれる先輩がいて評価され、将来への展望も持つことができているので、仕事が大切なものとなっているようだ。自立心を持ちつつある彼に、勉学を強いることはためにならないのではないかと。彼はいずれ勉強する必要性を感じる時があるかもしれないし、一生ないかもしれないが、それは彼が選び取るものだと思う。今、私にできることは、仕事以外のコミュニティの一部としてこの活動を共に楽しく過ごせる場とすること、今の仕事以外にもたくさんの生き方があることを知ってもらう窓のような存在になること、彼の話に耳を傾けることで彼が自分の経験や感情に向き合い成長することを助けていくことなのではないかと考えている。」

これに対して経験豊富な保護司さんが私の話をしっかりと受け止めてくださったことによって、私は、彼とのこれまでの関係を振り返り、また、自分の考えを整理し自信を得ることができた、これが活動を進めるよい転換点になったと感じています。

事例3 3者(BBS・地方公共団体・国立就業支援センター)連携プロジェクト

(札幌市内の地区BBS会からの報告事例)



北海道に、保護観察中の少年たちが農業実習を受けながら改善更生を目指す国立の入所施設があります。その施設所在の町は非行少年の立ち直り支援に町を挙げて取り組んでいます。そこで、法務省及び日本 BBS 連盟の支援のもと、道内 BBS の大学生の会員が中心となって企画・運営する3泊4日の標記3者連携プロジェクトが実施されました。道内の BBS 会員がサポート役を務め、全国の BBS 会に呼び掛けて実施したものです。なお、このプロジェクトは平成31年度までの2年間で終了しましたが、その後も、BBS 会ではクラウドファンディングで資金を集め、農業実習だけでなく学習支援も行うなどして形を変えながらも少年との関わりを続けています。

●目的

BBS 会員が施設入所中の少年と農業実習等を通して交流することで、少年の改善更生を促進するとともに、BBS の活性化や町の取組の広報を図る。これにより、地域と連携した更生保護への国民の理解や協力を促す。

●プログラム

ドッチビーやソフトバレーなどのスポーツを通じたグループワーク、シイタケハウスでの収穫など少年との農業実習、地域の協力者との交流会などを行う。

●会員及び保護観察官のコメント

会員1:少年とのスポーツや会話を楽しみながらの農業実習など普段できない経験ができてよかった。また、地元の方々から「特別視しないで、町民と同じように接している」という話を聞いて、これこそが地域での支援だと思った。このプロジェクトを通して更生とは何かについて改めて考え、孤立した施設で決められた生活をするのではなく、人と交わり、その温かさを感じることでこそ更生できるのではないかと思った。

会員2:少年たちと交流してみると、根は優しい少年ばかりで、世間でいう非行少年のイメージとは違っていた。これまでのイメージは少年たちへの蔑視のレッテル張りなのではないかと思った。問題とすべきは悪しき環境であり、BBS 活動を通して社会から孤立した少年たちに手を差し伸べ、過ちを犯させないように努力したいと痛感した。

保護観察官:4日間の短期のプロジェクトにもかかわらず、少年たちは同世代の若者と交流することで、活気が漲り、一緒に実習やグループワークをしたり、悩みを相談したりしながら、大いに楽しんでいたようだ。少年たちはいつもは大人ばかりという環境下にあるため、新鮮で開放的な気分を味わえたものと思われる。大人たちの前では見せない姿も見受けられ、若者には若者の支援が必要であることやその大切さを感じさせられた。



事例4 少年院での学習支援

(京都府内の地区BBS会からの報告事例)



活動の目的

- ・ 院生の学力向上を図る。
- ・ 院生が施設外の人と関わることにより院生のリフレッシュを図る。
- ・ BBS 会員が訪問することで、立ち直りを支援してくれる人がいることを示し、院生たちの不安を軽減する。

活動概要

少年院で行われている教科授業に BBS 会員が参加し、以下のような学習支援を行う。

- ・ 授業についていけない院生の隣に座り、分からないところを説明
- ・ 高校受験に向けて勉強をしている院生の学習支援
- ・ 院生の自習で分からないところの説明



実際に活動した BBS 会員のコメント

始めは院生と BBS 会員のどちらも緊張していますが、徐々に笑顔で返事をしてくれたり、分からないところがあれば積極的に質問をしてくれるようになったりして、私たちはすごく嬉しい気持ちになりました。

院生によって学習の進度や意欲、適性等が異なる中で、BBS が教科授業に参加し、院生一人一人に合わせた学習支援をすることで、院生が「勉強って楽しいんだな」と感じてもらえば、BBS の学習支援は意義あることだと感じています。

私たちの学習支援をする時間が、院生にとって少しでも心地よく、楽しく勉強に集中できる時間になるように、今後もより良い活動を目指します。

事例5 児童自立支援施設(*)でのレクリエーション

(広島県内の地区BBS会からの報告事例)



活動の目的

- ・ レクリエーションを通してルールを守ることやコミュニケーション能力の向上を図る。

活動概要

児童自立支援施設に入所している小・中学生を対象にレクリエーションを実施

- ・ アイスブレイクやゲーム、お菓子作りを企画
- ・ 当日は少年たちと BBS 会員がグループになって一緒に楽しむ。
- ・ クリスマスの時期には BBS 会員の手作りのプレゼントを一人ひとりに渡す。

(*) 児童自立支援施設とは、不良行為をしたりするおそれがある児童や、家庭環境等から生活指導を要する児童を入所又は通所させ、必要な指導を行って自立を支援する児童福祉施設。

実際に活動した BBS 会員のコメント

初めは緊張していた少年たちが、少しずつ BBS 会員と笑顔で会話をできるようになったり、年齢に比べると少し幼い子ども向けのゲームにも少年たちが夢中になったりして、レクリエーションの時間を楽しく過ごしてくれていると感じます。

施設職員の方々によると、同職員以外との関わりが少ない少年たちは、ボランティアの訪問を楽しみにしており、とりわけ年代が近く大学生が多い BBS のような団体の会員の話を聞いたり、一緒に体を動かしたりすることは、いい刺激になっている、また、中には、大学に興味を持ったり、いろいろな職業を知り将来の夢が広がったりする少年もいるとのこと。レクリエーションの楽しみだけでなく、BBS との関わりを通して、少年たちが自分を見つめ直すいい機会になればと願っています。



(レクリエーションリハーサルの様子)
※少年たちは写っていません

2 非行防止活動

(1) 少年の健全育成・非行化防止活動

事例1 子ども食堂 (東京都内の学域 BBS 会からの報告事例)

日本では 7 人中 1 人の少年が相対的貧困にあると言われており、その状況にある家庭では、親の仕事の都合などから、子ども 1 人での食事、いわゆる「孤食」であることが多くなっています。

このような現状に鑑み、相対的貧困家庭の少年を対象に、予約制の子ども食堂を始めました。



活動の目的

- ・「食べる」ことの楽しさや大切さを伝える。
- ・ BBS 会員が「お兄さん・お姉さん」のような存在になり、少年の居場所を作る。

活動概要

- ・ 少年たちに無料で夕食を提供する。
- ・ ボール遊び、かくれんぼ、お絵かきなども行う。



(子ども食堂の様子)

実際に活動した BBS 会員のコメント

少年たちの変化としては、コミュニケーション能力向上が挙げられます。

以前は、特定の学生や少年同士でしか話さない、また特定の学生が少年と一緒にいなければならないということがありましたが、子ども食堂の回数を重ねるにつれ、今までほとんど話したことのなかった学生や少年と話したり、一緒に遊んだりして、コミュニケーションが取れるようになった少年が増えているように感じます。

今後の課題として、相対的貧困の少年たちの学力が概ね低いことが分かったので、一緒に勉強することを考えています。

事例2 不登校少年に対するオンラインを活用した学習支援

(茨城県内の学域BBS会からの報告事例)

茨城県内の不登校児の親の会からの依頼により、民間のボランティア組織に茨城県BBS連盟が協力する形で、

2020年から不登校の小中高の対象少年14名にオンラインを活用した学習支援を実施しています。

私たちの活動は、複数の組織が連携・協働することで行っているプロジェクトです。ボランティアスタッフや親御さんと一緒に考え、少年それぞれにとって一番いいやり方を追求しています。

まず、保護者、少年との面談をし、その希望に応じて、週に1度おおよそ1時間、相互のコミュニケーションツールとしては「Zoom」ミーティング、学習支援ツールとしては自学自習用勉強サイト「ネットレ」を活用して、学習支援等を行っています。

学校に行きたくても、何らかの事情で行くことができない状態は、学習の格差を広げてしまいます。そこで、私たちは少年たちに学習の習慣をつけてもらい、学習に遅れが生じないように、この活動に取り組んでいます。また、私たちと少年たちとは、上下関係でもなく、かといって全くの横並びでもなく、いわば斜めの関係ですので、学習支援だけではなく、少年たちの悩みや相談に乗ることもできます。これからも、学校や社会から誰一人取り残されることのないよう少年たちとの関わりを続け、犯罪や非行のない明るい社会にして行きたいと願っています。

BBS会員のコメント

新型コロナウイルスの影響により対面での活動がままならず、地区会で取り組める活動を打ち出せずにいました。そのような中、県連盟からの誘いがあり、始めはオンラインでの活動は経験がなく戸惑いましたが、学習支援に興味があったためこの活動に参加しました。

私は、学習障害をもつ1人の中学生の男子少年とZoomを使いながら一緒に勉強し始め、半年ほどが経ちます。最初は、時間が来たら始め、オンラインの教材を活用し、分からないところがあったら質問に答え、時間になったら終わるというだけでした。しかし、少しずつ勉強の前後に会話をするようになり、硬かった表情も柔らかくなってきました。苦手だった漢字の読み書きも今では大分慣れ、徐々に出来るようになってきています。

学習支援をして特に良かったと思えるのは、少年がそれまではできなかったことができるようになるのを一番近くで見られることです。今では、この学習支援に参加したいという会員が増え、より多くの少年たちに対して支援ができるようになりました。

コロナ禍の中での初めての取組のため、参加している会員も手探りでやっていることが多く、活動の中では課題や悩みも出てきます。それに対応するために、週に1回の定期ミーティングを行い、それぞれの活動の報告、また活動の問題点を共有して、みんなで解決しています。この取組は「with コロナ」に合致していると思うので、この経験を今後役に立てていきたいです。



(2) 広報・啓発活動

事例1 第70回 “社会を明るくする運動” における活動

(東京都BBS連盟からの報告事例)

上記の運動の一環として、令和2年11月 26日(木)、
東京・渋谷にあるホールにて、

「よしもと芸人とBBS会の「もっと知ってほしい！BBS会」～ゆるくてコアなボランティア～」
を開催しました。

本イベントは、一般の方々に「BBS会をもっと知ってほしい！」という思いから、BBS会自らが企画・運営し、芸能プロダクションの全面的な協力の下、実現したものです。ちなみにこのホールは主に若手芸人の出演場所としてプロダクションが所有しているもので、芸人の若いファンたちが集う場所となっています。ここで、コロナウイルスの感染拡大防止のため、観客の席を1席空けとするなど、最大限の感染対策をして開催したところ、若い人たちを中心に多くの方々が見に来てくださいました。

今回は、BBS会員が主体的にイベントを行う初めての試みで、最初はどのようなことをどうやってどのような形にするのか、右も左もわからず、てんやわんやでした。日々ボランティア活動は行っているものの、イベントを行うことに関しては素人でしたので、正直不安もありました。しかし、法務省やプロダクションの方々と毎週会議を重ね、様々な助けを借りながら、この活動を広く知ってもらい、興味を持ってもらう方法を模索しました。

皆で思ったこと伝えたいことを話し合い、徐々に内容が明確になっていき、イベントを形にすることができました。イベントでは、「活動」ではなく「人」に焦点を当て、エピソードトークなどを行いました。活動の紹介はこれまでも行っていましたが、このように「人」に焦点を当てるのは初めてかと思えます。この中では、学習支援をしようとしたら今の学生と自分が学生の頃に勉強してきた内容が違いすぎて教えられず愕然としたとか、少年院の運動会で少年たちと綱引きをすることになったのに、うっかり本気を出してBBS会側が勝ってしまったというちょっと大人気ない、でもクスッと笑えるようなほのぼのとしたエピソードが次々と披露され、会場全体が温かいムードに包まれました。

実際にアンケートでも少年とのエピソードをもっと知りたいという要望がありました。このイベントが、BBSや更生保護制度に興味を持っていただくきっかけになればいいなと思っています。



事例2 薬物乱用防止キャンペーン (和歌山県BBS連盟からの報告事例)

運動の目的

薬物の乱用防止の啓発

活動概要

BBS会員が薬物に関する研修や他機関との連携を通して、薬物使用や依存の問題を理解し、乱用防止の啓発や相談活動等に参加しています。

- ・県の薬物乱用防止指導員としての活動
- ・夜間に薬物相談電話”Drug Recovery Line”を実施

また、国連の「国際薬物乱用・不正取引防止デー」に合わせ日本では「薬物乱用防止キャンペーンと国連支援募金運動」が行われ、日本BBS連盟も協賛し、全国各地のBBS会が啓発活動や国連支援の募金運動に協力しています。その募金は、麻薬・覚せい剤乱用防止センターを通してUNODCへ毎年贈られています。(DAPC Grant)

